
Fontane —世界の泉—

架羅馭璃＊かのん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fontane —世界の泉—

【Nコード】

N8226Y

【作者名】

架羅駆璃*かのん

【あらすじ】

12人の異界人は500年後に目覚め、人間と契約をすべく人間界へ舞い降りる。契約を交わした異界人らが呪われていることを知り、人間は解く方法を調べる。解く方法は解ったが、代償として契約者の命を異界人に捧げるという驚愕の事実を知る。それぞれの契約者は泉を探す。自分たちが犠牲となるか、異界人を犠牲にするか迷う。異界人全員の呪いが解かれる。そして契約者の人間たちの運命は——！！

作家の【架羅駆璃千佳】と【かのん】がコラボレーション!!
2人で作った物語が今、幕を開ける——!!!

序章 ― 呪われた異界人 ―

世界は「人間界」「天界」「地界」「異界」の4つに分けることができる。その中の地界に住む妖精4人とエルフ5人と異界に住む悪魔3人が世界の長に呼ばれた。

「お前たちは何故呼ばれた解なにゆえっているか」

長の低くしわがれた声が王宮に響く。長はどの世界にも属さない。つまりは『無』ということ。

「はい。解っております」

大きな羽根をもつ妖精の1人が言った。長はその妖精を鋭い目付きで見遣った。

「…。そうか。では問う。マリス、お前は何故ここへ呼ばれたか」

マルスよ呼ばれた妖精の女の子は少し顔を曇らせた。

「私は…。みんなを止められなかった…」

「ああ、お前は地界の長というのにみなを止めきれなかった。終いにはなんだ？『私がすべての責任をとる！？地界も落ちこぼれたもんだな』」

長はため息をついた。跪ひざまずいて顔を下げている12人のうち、1人がバツと顔を上げた。

「ん？なんだね？——そうか！エルフも地界だったな。落ちこぼれの地界のピエール」

ピエールは人間の男とそう変わりはしない恰好^{かっこう}。しかし、エルフという種族は耳が長い生き物。

「地界は落ちこぼれじゃない！！」

ピエールは大声をあげて言った。

「ほう。ピエール、この私に楯突^{たてつ}こうというのかい！？なかなかの度胸と見える」

ピエールの額に一筋の汗が流れた。

「俺は確かに落ちこぼれかもしれん。しかし、だからといって地界は落ちこぼれじゃない！！撤回してもらおうか。長！！！」

長も額に血管が浮かびあがった。それを見ていたもう1人のエルフが言いだした。

「もうやめなよ」

「五月蠅い！！故郷をバカにされて黙っていられるかよ！メタルだつて言いたいことくらいあんだろ」

「そつ……」

メタルは言い返す言葉が見つからず黙ってしまった。

「よかるっ…」

長はゆっくりと玉座から腰をあげた。

「これ以上話しても無駄だということがよく分かった。それ相應の罰を与えんとす！」

長は両手を上に勢いよく上げた。

その瞬間、12人の姿が跡形もなく消え去った。その代わりに、さつきまで12人がいた場所にピアスやネックレス、ブレスレットなどのアクセサリーがある。

「永久^{とわ}に眠れ。深い泉の底へと誘^{いざな}うがいい！」

アクセサリーが一瞬にして跡形もなく消え去った。

12人の異界人は皆散^{みな}り散りにどことも知れぬ泉の底深くに500年もの間、眠り続けた。

第1章ノ1 black + violet

あくる日の朝。もう日が昇ってだいぶ時間が経っている時間に秋野^{あき}
千枝^{のちえ}はベッドから白くてキレイな脚を覗かせた。

「あー。学校の準備しない…」

艶のあるサラツとした黒髪を無造作に手櫛^{てくし}でといた後、1階に降り朝食をとった。今日の朝食はいつもと同じ食パンと紅茶。千枝は制服を着、2階にあがった。千枝が通う高校の夏の制服は、薄い水色のカッターシャツに夏の空色のネクタイ。カッターシャツには高校の紋章が縫ってある。ズボンは紺色（↑男子ver.。薄いピンクのカッターシャツに夕焼け空色のリボン。カッターシャツには男子と同じ高校の紋章が縫ってある。スカートはミニスカで赤とピンクのチェック。

千枝の机には宿題のやりかけのままで広げてあった。ふではこから飛び出したペンたちが散乱^{さんらん}している。昨日と変わらぬ配置。いや、1点だけ違う。

（あれ？私こんなブレスレット持ってたっけ？）

机に端に見知らぬ？程のバングルのようなブレスレットがあった。黒い珠と紫の珠が埋め込まれた銀のシンプルなブレスレット。黒い珠のには【F】と彫られていて紫の珠のには【6】という数字が彫られてある。ブレスレットの裏に小さい文字が彫られてある。

「marais?」

千枝は小さい文字を読んだ。そしたらなんと、ブレスレットが黒い光を放ち出した。

「うつ…!」

光が止んだと思ったら170?程の男が立っていた。紫の髪は少し長めのストリート。目つきは悪く、露出が多い。しかも何故か尻尾が生え、その先にはランプのスペードのような形をしている。

「………………。なんだ?ここ」

男は辺りをきよきよと見渡した。千枝は何も見えていないような仕草で学校の準備をそそくさと整え、家を出た。千枝は気づいていない。自分の腕にあのブレスレットが付いていることを。

「あつ! 捺」

千枝は登校中の友達の加藤捺かとうなつを見つけて大きく手を振った。捺はこげ茶色のショートの髪を揺らしながら千枝の前を歩いていた。千枝の声に気付き、後ろを振り向いた。

「あ…おはよう」

捺は一瞬恐い顔をしたが、すぐに笑顔になった。

「あれ? 千枝、そんなブレスレット昨日付けてたっけ?」

捺にそう言われハッと腕を見た。千枝の右手首には今朝机の上にあつたブレスレットが付いていた。

（え、これ…。今朝机の上にあつたやつ…。私あのまま机の上に置いて来たはずなのにどうして！）

「どうかした？」

「え！あーこれね、他校の友達に誕プレでもらったんだよ。誕プレまだだったから」

「へー。その友達千枝のことよく知っているんだね」

「へ？」

「だってそのブレスレット何気に似合ってるから。黒と紫なんて千枝にピッタリだよ」

「え、うん。ありがとう」

千枝はブレスレットに左手で触れた。その手をすぐに引つ込め、次の話題に移った。

「そつえば、捺のピアスも可愛いね。今日は金とピンク？」

「え！？」

捺は自分の耳に触るとすぐに鏡を取り出し、耳元を映した。

「あたし、この2色のピアス持ってない…」

「え？もってないって？」

千枝は不思議そうに捺のピアスを見た。

「あはは。なんでもないよ。でもさ、なにか付けてたらご利益あり
そうだから付けておこつと。もしかしたらさ、夢かもしれないじゃ
ん？」

千枝は捺の言葉をすべて理解したとはい難い。

「んー。そうだね」

そう言つて2人は何事もなかったように学校へ向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8226y/>

Fontane —世界の泉—

2011年12月12日01時49分発行